バンドリらしくない世界で紡ぐ逆襲劇【ヴェンデッタ】

熊影

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

拙い文章が目立つとは思いますが、楽しんでいただけたら幸いです。

バンドリ×仮面ライダー×ｌｉｇｈｔ作品

もしかしたらあり得たかもしれない、大切な全てを踏み躙られた男が紡ぐ、全てを取り返す為の逆襲劇。

いざ、開演。

目次

バンドリらしくない世界で紡ぐ逆襲劇【ヴェンデッタ】――1
探偵事務所の朝――3
夕暮れとの邂逅――5
夕暮れはかく語る、その始まりを――7
夕暮れと灰と星と―1――10
夕暮れと灰と星と―2――13
夕暮れと灰と星と―3・――15
幕間―ー強さとは①――17
夕暮れと灰と星と―4――19
夕暮れと灰と星と―5――22
夕暮れと灰と星と―6――26
夕暮れと灰と星と―7――28
夕暮れと灰と星と―8――31
夕暮れと灰と星と―9――36
夕暮れと灰と星と―10――41
夕暮れと灰と星と―11――46
夕暮れと灰と星と―12――50
夕暮れと灰と星と―ー13――54
夕暮れと灰と星と―14――58

バンドリらしくない世界で紡ぐ逆襲劇【ヴェンデッタ】

その日は激しい雨が朝から降り続いていた、バケツをひっくり返したような、という表現が当てはまるほどには強く激しく降っていた。
風の名を持つ街の中にある、とある建物の中で、1人の男が黒いソファーに腰掛けて憂鬱気に窓を見る。
ーーまるで街が泣いているかのようだ。
詩的に心の内でぼやくものの、雨が降り止むことはない。ハードボイルドという言葉をその身で体現している、そう思わずにはいられない容姿をした男。
男は朝からどうも胸騒ぎを感じていた。
具体的なことは分からないものの、男のこれまで得てきた経験から何か良くないことが起きると、確信に近い感じがするのだ。
そしてそれは、現実と化す。
窓から視線を外し、気分転換に普段行っている極上の珈琲を淹れる為の研究をしようと立ち上がり、服の乱れを軽く整えたーー
ーードシャリと玄関から、重いものが落ちた音が、激しい雨音の中でもはっきりと男まで聞こえた。
響いた音にすぐさま反応、整えたばかりの服を翻し、足早に玄関に向かう。
先程までは一切感じなかった筈の人の気配を感じて警戒しつつ、何があっても対応出来るように気持ちを瞬時に整えた後、そっと扉を開けーー絶句。
そこに居たのは年端もいかない少年が、仰向けに倒れていた。
しかも傘もささずに雨に濡れたのか、濡れたない箇所が無いほどに全身ずぶ濡れで、このままでは風邪を引きかねない。
ーーしかしそんなことが考えられない位の衝撃が、少年の顔を見た男の頭に響いた。
その顔は左半分が真紅に染まっていた、それこそ思わず目を背けそ

うになる程度には。間違いなく重傷であった。
左頬には目元から顎にかけた裂傷、間違いなく跡が残るだろう、10歳になったかならないか程度の子供には酷な傷だ。
けどそれ以上に目を惹いたのは左眼……一言で、潰されていた。
詳しくは分からないがピックの様なものだろう、太く鋭いもので貫かれており、微かな呼吸が聞こえることから死んではいないようだ。それが幸か不幸かは男に到底判断出来はしない。
しかしこのままにしておけば死は明白、男は少年を抱え部屋に戻る。
病院に行くには恐らく時間が足りない、何より潰れた眼をどうにかするには現代医療ではどうしようもなかった。
だが男は一つだけなんとかなるかもしれないツテがある、ただしそれは賭けでしかなかった。
(あいつに、シュラウドに治せるとも限らない、最悪【ガイアメモリ】に頼る事になるかもしれない)
考えただけでも最悪の選択だろう、しかし男の歩みに一切の迷いはない。
何故なら例えばそれが罪だと言われようと、幼い命を見棄てる理由にはならないと、そう断じて。
(もしこれからすることが罪なら、喜んで背負おう。それでこの子が救えるなら‼?)
玄関を閉じて男が向かうのはこの建物の隠しスペース、地下に目的の人物はいる。
閉じられた玄関、その隣には木製の看板があり、そこには【鳴海探偵事務所】と書かれていた。

探偵事務所の朝

……夢を見た。

思い出したくもないが、覚えておかなければならない、矛盾だらけの夢を。

……それは記憶、俺の中で最も重要で、最も悲しくて辛い記憶。

そして何より、取り返したくて傷つけたくもあって、愛憎がこれでもかとグチャグチャに入り混じった、トラウマ以外何物でもない記憶だった。

『あはは、気持ち悪い、気持ち悪いよその泣き顔！そんな顔するならーーこうしてあげる‼？』

俺を受け入れてくれた家族以外で、初めて心から居場所と言えた、大切〝だった〟幼馴染は、笑いながら〝奴〟から受け取ったナイフで俺の顔を斬りつけた。

『それでは足りないわ■■、こいつにはこれ位してやるのがいいのよ‼？』

そしてーー何より大切な姉〝だった〟彼女は、同じ様に奴から受け取ったピックで、躊躇無く左眼を刺し貫いた。

死ななかったのは奇跡以外なにものではなく、激しくスパークする視界と意識の中で、奴はそれは醜い嘲笑を浮かべながら大切だった二人を側に抱き寄せて、俺に右手を翳して告げてくる。

『じゃあなモブ野郎‼？この主人公様を置いてヒロイン達に近付いた報いを受けなぁ‼？実に楽しい余興だった‼？』

言葉を言い終えた瞬間、謎の浮遊感が俺を襲いーー

『ーーっあ……尚冬ーー⁉？』

最後に見たのは、突然我に返ったかの様に泣き顔で手を伸ばす大切だった二人の姿でーー

夢は終わる、いつもいつも同じ終わり方で。

「んっ……」

ぼんやりと、目を開けて始めに映ったのは見慣れた天井。

6年ほど見慣れた天井を悲しいことにいつも通り憂鬱な気分で見

上げる。
始めは泣き叫びなから飛び起きたのを今でも覚えている、おやっさんには迷惑をかけてしまったと申し訳なさがあったものだ。
今では涙こそ流さなくはなった、トラウマであることには変わらないが進歩したと思っておこう。
取り敢えず壁に掛けてある古ぼけた時計を見れば、午前８時を示していた。生憎と学校には通ってないので遅刻の心配もないわけだが、普段は１時間は早めに起きているので寝過ごした感がある。
別に８時でも遅くはないのだが、取り敢えず少し急いで起きるとしよう。
身体を預けていたベットから出て、ベットの頭元に置いてある胸元に届く位の高さのタンスから服を取り出して手早く着込む。
シャツにボクサーパンツと言う格好から、黒一色の長袖に上からノースリーブのファー付き黒のジャケットを着て、紺のジーンズを履く。
そして首には春の季節には必要なさそうな赤のマフラーをして準備完了。
そして扉まで歩いて必要最低限のものしかない自室を出て、短い廊下を歩いていると何やら向かう先の応接間が騒がしいことに気付く。
何やら騒いでいる聞き覚えのある男女の声、またかと思いながら歩みを早めて応接間に出てみればーー

夕暮れとの邂逅

「あんたは毎度毎度可愛い子は口説かなきゃすまんのかー!!?!!?」
「待て亜樹子!?!?別に口説いてるわけじゃなくてハードボイルドにーー」
「ハーフボイルドが何言うかぁ!!?」
「グベラッ!?!?!?」
　応接間、玄関付近の来客用ソファの近くで繰り広げられるのは、日常茶飯事な光景で。
　最早伝家の宝刀としか言いようのない、無駄のない動き、無駄のない体捌きからのスリッパによる一閃が男の頭に叩き込まれ、無駄に心地良い快音を響かせる。
　とまぁ、実に介入するだけ無駄な光景に溜め息溢して、ソファから少し離れたところで苦笑している同居人の1人に声を掛けた。
「おはようフィリップ。朝からなにごと?」
「おはよう尚冬、いやなにアキちゃんがこんな時間から依頼人を連れてきてね。何やら急ぎの用らしいけど、その依頼人に翔太郎が急に興奮してね。ハードボイルド風に挨拶し始めたらあぁなった訳さ。」
「結局いつも通りか……」
　理由は分かったので直ぐに興味が無くなったが、別の事に興味が湧いた。
　フィリップの言う依頼人、先程は2人の影にいたため見えなかったが、確かにソファには見慣れない人影が5人見えた。
　見た目は俺と変わらない位の年齢の少女達だ。ただ翔太郎さんが騒ぐのも分かる位に揃いも揃って美少女だらけ。
　赤メッシュにピンク、茶髪に灰色に紅色とバラバラの髪色、これだけ目立つ容姿なのに少なくとも俺は彼女らに関して一切知らない。
　この街の住人であるならこの容姿だ、少なからず噂は入る。にも関わらずに知らないのなら別の街から来たのだろう。
　何分俺には情報収集には実に適したものがあるからなのだが、今はいいだろう。それよりもやることがある。

「フィリップ、２人を頼む。俺は客人の飲み物を入れてくる。」
「それが良さそうだ、頼んだよ。」
返答には手を振って答え、キッチンを目指して歩き出す。
はてさて所長が急ぎだと連れてきた彼女達は、果たしてどんな依頼を持ってきたのかと少し気になりながら、手早く準備するとしよう。
ーー数分後。
「先程はうちの者がお見苦しい姿をお見せしました。良ければこちらをどうぞ。」
人数分（自分たち含む）の珈琲を御盆に乗せて応接間に戻り、先程の醜い争いについて謝罪しながらコーヒーを提供する。
知り合いにコーヒーを淹れるのがプロ顔負けと言ってしまうくらいに絶品を淹れる人がいて、その人から教わったコーヒーだが、果たしてお口に合うか心配だが今はすべきことをしよう。
「ようこそ鳴海探偵事務所へ。私はこの探偵事務所に所属する探偵の１人、詩人尚冬（しびとなおふゆ）と申します。」

夕暮れはかく語る、その始まりを

詩人尚冬、何とも偽名臭い名前だ。実際に偽名見たいなものなのでツッコミようがないが。
「しびとって、変わった名字だね～」
「えぇ、よく言われます。」
灰色の、眠たげな眼をした子にツッコミされるが、割と自己紹介の度に高確率で言われるのであまり気にせず流しながら5人を改めて見ると、一つ気がついた。
「早速ご用件を確認したいところですが、そちらの方は大丈夫でしょうか。何やら気分が優れないように見られますが……」
奥の方に座っていたというのもあるが、1人ピンク髪の子だけが周りと比べ異様に暗い。
他人の俺が気付いたぐらいだ、他の四人もとうに気付いており、チラチラと見ているが当の本人は一切気付いていないのか振り返りもしない。それだけ、気に病むことがあったのか。
「えぇ、その……今回の依頼にかなり関わっているのですが……」
切り出した茶髪の子は視線を所長、亜樹子さんに送ると所長は力強く頷いて答える。
「私からも説明するよ、今回の依頼はね、竜君に相談されたものなんだ。」
「竜さんに?」
竜さん、その人こそ珈琲の淹れ方を教わった人だが、本職は警視。つまりは警官である特殊犯罪を専門に対応する専門家の1人だ。
その竜さんに相談された依頼となれば内容は限られてくるが……
「その、信じてもらえないかもしれないけど、私達は今バケモノにストーキングされてるみたいなの。」
赤メッシュの子は本当に言い辛そうに顔を顰めながら告げる、バケモノと。
確かに普通なら信じられないワードだ、バケモノなんてＳＦやファンタジーの世界でも無いのにだ。

けどーー
「バケモノ、ですか。それは初めは人間の姿をしていましたか？」
「え、えっと確か初めて見たときは確かに人間だったよなつぐ？」
「うん、けど何か懐から取り出してたよね。ちょうどその時は夕暮れで良く見えなかったけど……モカちゃんは見えた？」
「見えてたよ～あれは確か、ＵＳＢみたいだったけど変な形だったよね～」
「そこまで見えてたんだモカ、私にはそいつがそのＵＳＢを押した瞬間に音が聞こえた気がしたな。確か……《アント》だったかな。それからそいつの身体がバケモノに変わったんだよね。」
ＵＳＢ、そしてアントという音、使った瞬間人間がバケモノになった。
そこまで出て分からない俺たちではない、所長含めた３人に目配せすると３人とも頷いてくれたので、引き続き俺が口を開く。
「情報をありがとうございます。では我々への依頼はそのバケモノへの対処でよろしいでしょうか？」
「そうだけど、その本当に大丈夫なんですか？言ってはなんですけど、その、バケモノに対して有効な手段があるんですか？」
「おい蘭……」
まぁ、蘭というこの言い分は正しい、見た目は自分たちと変わらない少年やどう見ても青年しか居ない場所だ。危険な目にあったのならそう簡単に信用出来ない面子に違いない。
しかしだ。
「ご安心ください、我々は貴女方が遭遇したバケモノーードーパントに関しては間違いなくプロですので」
プロ、そう自負できる位には散々相手してきたのだ。例えどんなメモリだろうが必ず依頼はこなしてみせる。
そう思い、口にしたプロという単語。それに真っ先に反応したのは今まで会話に参加していなかった少女。
「プロ……だったらお願いしますっ‼？一刻も早くあのバケモノをどうにかして⁉？じゃないとカイ君が……カイ君がまた自分を犠牲に

しちゃうよぉ……」
突然顔を起こしたかと思えば、その眼には大粒の涙が浮かんでいて……
勢い良く立ち上がり、ピンクの髪を靡かせて俺に飛びかかってきたと錯覚するぐらいに勢い良く肩を掴んでそう告げた。
告げた後、彼女は膝から崩れ俺の服の裾を掴んだまま泣き始め、急な事に呆気に取られていた四人は直ぐにひまりと彼女のなをよびながら彼女の側によって慰み始める。
あまりにも必死な姿、カイ君とやらが誰かまるで分からないが、その姿を見て俺が取るべき手段は一つ。
紡いでいるため視線は合わないが、それでもしゃがんでなるべく顔の高さを合わせつつ、敢えて普段通りの口調で。
「任せろ、必ず依頼は遂行する。あんた達の日常を、必ず取り戻してみせる。」
だから話してくれ、事の発端を。
そう告げるとひまりさんはより涙を流しながらもポツリポツリと話してくれた、事の全てを。
それを俺たちは了承、正式に依頼としてうけるとことになる。
……そして俺はこの時は知る由もなかった。
この依頼を機に全てが動き始める、終わった筈の星の物語が再び輝きを取り戻して。
敗者が勝者の栄光を踏み躙る逆襲劇（ヴェンデッタ）が、再演する。

夕暮れと灰と星と―1

依頼を受けることとなった俺たち鳴海探偵事務所は、５人を落ち着かせた後に改めて依頼を確認した。

まず彼女達は先程名前だけ出たカイ君とやらを含め全員幼馴染らしい、彼女達の名前も改めて教えてもらった。

そして６人でバンドａｆｔｅｒｇｌｏｗを中学時代より組んでいるとのこと、実際にはカイ君とやらはマネージャー兼サポーターらしく、バンド活動は此処にいる５人で行っているとのこと。

時折問題があっても６人で力を合わせて解決してきたとのことだが、今回は６人が力を合わせても解決出来なかった為、依頼としてここに来たらしい。

その出来事が、先程の会話内容。二週間ほど前から、どうやら女性陣全員がストーキングされているとのことで、複数犯によるものらしく、初めの内はカイ君が見付けた不審人物の悉くを見付けては可能な範囲で対応し、既に３人ほど現行犯で警察に突き出していたとのこと。

その時点で学生としてはこの上なく優秀な人材だと分かる。無理に１人で捕まえるのではなくしっかり警察に連絡して対応するのはそうそう出来るものじゃない。

しかし逆に無謀としか言えないのも事実、一歩間違えればどのような結末が待ち受けるか直ぐに分かる筈、ましてや落ち着いて警察に連絡出来るだけの冷静さもあるなら尚更だ。

上原さんはその行動に特に心配しているようで、やはり怪我をすることもあったらしい、話を進めようにも溢れる涙が遮るほど。

そんな彼女の心配が現実になったのは、事務所を訪ねる２日前のこと。アントメモリ使用者ーーアントドーパント襲撃時の時らしい。

その日は休日で、ストーキングもカイ少年の活躍で３日ほど見かけなくなったため久し振りのバンド練習に明け暮れたらしく、満足した気分で帰っていた際に見知らぬ男に前方から声をかけられたそうだ。

その男がドーパントに変身した際には恐怖で動けなかったと５人

は語る、その時の恐怖を思い出し震える羽沢さんを宇田川さんがそっと抱き締める。
そしてドーパントが5人に近付こうとして、逆に駆け出したのはカイ少年だったらしい。
何でもカイ少年、昔から剣術や空手などの武術を習っていたらしく、その日も念のためにバットケースに剣術の先生から借り受けた模造刀を入れてたそうだ、あくまでも最終手段として。
それをバットケースを投げ捨てて初めから模造刀を抜刀したとのこと、一目見ただけで使わなければならないと分かったからだろうがしかしーー
ドーパント相手に効くはずもなく、衝撃でよろけしたそうだが直ぐに反撃に会い、殴り飛ばされて数メートル吹き飛び彼女達の足元まで転がってきたらしい。
けれどカイ少年は思いの外頑丈なのか、それとも気合いか、直ぐに立ち上がりドーパントに立ち向かった。その際に彼女達に逃げるよう促して、警察を呼ぶようにも伝えて。
しかし彼女達は逃げなかった、いや逃げれなかった、想定外の恐怖が彼女達から逃げる意思を奪っていたから。
そんな彼女達を見て、カイ少年は何を考えたのかアントの攻撃を利用して彼女達の近くまで後退し、防御にも使ったのか剣先が折れた模造刀を正眼に構えて、彼はーー
「歌い出したんだアイツ、一節しか聞こえなかったからどんな歌かは分からなかったけど。」
「歌？ドーパントとの戦闘中に？幾らなんでも無謀が過ぎるな……」
確かに翔太郎さんの言う通りなんだが、妙に引っかかる。何故歌った、まさかとは思うが……
嫌な予感がした、あり得ない筈だ、『アレ』
はもう俺以外に使い手はいない筈。
額に汗が滲むのに気付くことなく、俺はそう考えていたが、そんな予感は直ぐに裏切られた。
「どんな歌だったっけ～」

「えっと確かーー」
「創生せよ……」
「ん、ひまり？」
「創生せよ、天に描いた星辰をーー我らは煌めく流れ星……そう言ってたよ。」

夕暮れと灰と星と―2

その内容に、それこそ強烈な衝撃を覚えた。かつて食らったウェザードーパントの攻撃を思い出すぐらいに。

同じ反応をしたのだろう、事務所組からの驚愕の視線が突き刺さるのを感じる。

その反応は当然だ、何せ彼らには俺以外使えないと伝えていたのだ。そう言ったからこそ自分が一番信じられない。

「……間違い無いのか？」

「間違い無いよ……聞いたこともない声で、見たことない顔で歌ってたもん。間違えようがないよ……」

涙のせいで腫れた目元を気にすることなく上原さんは答える、はっきりまちがいないと力強い目で俺を見つめてくる。

信じたくはないが、力強い目を見て信じるべきだと思った。

まぁ、結果的にはカイ少年と確実に話をしなければという想いが強くなるのだが。

今後の予定をひとつ組み上げた所で、話の続きを促す。

カイ少年はその一節を歌ったあと、それこそ人が変わったような恐ろしい形相でドーパントに突撃したらしい。

ただ正確には目の前に居たはずなのに、気付いた瞬間にはドーパントの目の前に居て、刀を振り下ろした形になっていたらしい。ドーパントに関しては大きく仰け反っていたと。

そしてその場で左に回転、勢い付けた回転斬りはガラ空きの胴に叩き込まれ、〝爆発〟。

何故かは分からないが確かに爆発したと、青葉さんは言う。普通なら確かに分からない現象だが、あの一節を知るものならなんら不思議はないだろうさ。

その事を知る俺は特に気にせずに先を促す、その際に美竹さんに訝しげに見られたが気にしない。

その爆発は大きなものではなかったが、ドーパントを吹き飛ばすには十分だったらしい。

まるで先程の趣向返しの如く勢い良く吹き飛んだドーパントは、そのまま壁に激突し蜘蛛の巣状の罅を入れたらしい、思わない反撃にドーパントが選んだのは逃走だった。
脱兎の如くヒビが入った壁を登り逃げ去るドーパント、カイ少年は油断無くそれを見つめていたが、完全に逃げたと分かり気が抜けたのかその場に崩れ落ちたと言う。
慌てて駆け寄った5人はカイ少年に声を掛けようとして絶句。
何故ならカイ少年は右半身を中心に火傷を負っていた、特に刀を持っていた両手には炭化すら見られ、持っていた刀は歪に歪んだ取手を残して刃は跡形もなかったとのこと。
そこから先は上原さんが特に取り乱したのを4人で何とか落ち着かせながら、警察や病院に連絡、カイ少年は診断の結果火傷以外にも脇腹を含めた複数箇所に罅が見られ、約一ヶ月の入院になるそうだ。
そしてドーパントに関しては彼女達の街の警察では対応が難しいらしかった、それはそうだろうさ。
ドーパント自体は知っていても実際にドーパントが現れているのは今までここ風都のみ、ガイアメモリ対策班があるのもまた風都のみだ。
そこで彼女達は風都警察に連絡するように伝えられたらしい、その際に力になったのは何でも羽沢さんのご両親らしい。
何でも羽沢さんの実家は喫茶店らしく、そこに偶然寄った竜さんが大層そこの珈琲を気に入ったらしい。今まで常連客に数えられる位休みの日には訪れており、所長も行ったことがあるらしい。
そこで自身が警察であることを軽く話したらしく、ガイアメモリに関して何かあれば協力すると名刺を渡していたそうだ。
その行為が今日の依頼に繋がったらしい、ただ本当なら竜さんに依頼したかったとのことだが生憎今竜さんは風都には居ないのだ。

夕暮れと灰と星とー3・

その理由は今はいい、いない事実が変わるわけではない。
しかしそうなるとーー
「花咲川か、隣街といえ誰が行く？」
流石に全員ではいけない、何せ落ち着いてきたはずのこの街では再びガイアメモリによる事件が増えてきているからだ。
だから一時的とはいえ竜さんが居ないこの状況で全員が離れるのはマズイ、ドーパントに対応できる奴が居なくなってしまう。
そう思って事務所組に声を掛けたら、3人は心配そうに俺を見ていた。
どうしてーーなんて下手な芝居はいらない、だって今も地名を口にしただけなのに手の震えが止まらないのだから。
「尚冬、ここは俺とフィリップが担当する、だからーー」
「お前は残れ、なんて言うのか？冗談じゃない。」
あぁ、確かに心配してくれる理由もよく分かってる。全部話しているのだから嫌でも分かってる。
特に〝6年前〟に思い出した記憶が余計に足を引っ張ろうとする。
苦痛は嫌だ、栄光は要らない、勝利するなんて冗談じゃない。
そう考えていた時期があったからこそ、尚のことーー
「もう逃げるのは終わりだ、何時までも泣いて泣いてーー無力を理由にするのは。」
どのみち決着を付けなきゃいけないのだから、今回の依頼は俺にとって渡りに船だ、受けない理由は無い。
「今回は俺が受け持つよ、サポート宜しくな3人とも。」
「……ったく、臆病者のくせにこういう時だけ頑固者とはな、しょうがない弟分だ。」
「だからこそ支えるのだろう、今までもこれからもそれは変わらない。」
「そうだね、でもそれがナオ君だもの。」
……ほんと、いい仲間を持ったよ。

３人の暖かい目は恥ずかしいものがあるが、あぁ、悪くないものだ。
「決まりだな、そちらも構いませんか？」
「良いよ、あと敬語じゃなくても構わない。見た感じ同年代っぽいし。」
「なら遠慮なく、このまま出発するかい？それなら準備に１０分ほど時間をいただきたいが。」
ドーパントが居るなら必要なものを持っていかなければならない、生憎とまだ寝起きなのだ。
「私達なら大丈夫です、寧ろ早く来すぎて迷惑だったんじゃ……」
「お気になさらず羽沢さん、慣れてるから。」
この時間に依頼が来るのは珍しくはない、依頼は時間を選ばないから。
だから落ち着いて対応出来る、今回も変わりはない。
事件の真相を解明し、ドーパントを倒して依頼者の生活を取り戻す。
それが俺たち鳴海探偵事務所なのだから。
許可は得たので、準備をしに自室に戻る。
とはいえ準備するものは多くはない、携帯に財布、そしてドーパント用のツールにーー
「こいつを忘れちゃ話にならないしな。」
棚の上、朝敢えて触れなかった鞘付きの大振りのナイフを取り、コートの下にズボンに水平に取り付けた。
こいつこそが俺の本命、準備はできたし行こうか。
応接間に戻ると５人も移動の準備を終えていた、なら後は行くだけだ。
６年ぶりに戻るとしよう、生まれ故郷にーー
全てが奪われた、因縁の場所に。

幕間ーー強さとは①

強さとは何か、いつの時代でも議論に上がった話題の一つ。
その答えは実にバラバラだが、明確な答えは少なからずある。
すなわち、納得出来るだけの理由は少なくともあるのだ。
では強さとは何か、ある男が言うにはこうだ。
「無論〝数〟だね。」
数、それは確かに強さの1つであろう。
歴史もまたそれを物語っている、数多の戦の多くは数による優勢の勝利が見られるからだ。
数の暴力、と言う言葉がある様に人間だけのものではない、世界中の至る所で見られるものである。
特にーー昆虫とかはその代表だろう、人間よりも遥かに簡単に数万、数十万と言う膨大な数を揃える事が出来る。
生態系の下にいるとはいえど、ある意味だからこそ許されたものなのかもしれない。
だからもしそれがーー人間が手にしたらどうなるか、数という力が特に何らかの力を持つものが手にしたら。
その答えが、いま男の手の中にあった。
「うん、案外使い易いね。転生特典様様だ。」
花咲川某所にて男はソファに座ったままで、手にしたソレを満足気に眺めていた。
ーーその足元には、気絶しているのか規則正しい呼吸をしながらもピクリとも動かない別の男の姿があったが。
「しかしこいつは何ともこの男には勿体無い、て言うより使い道がストーカーしか思い浮かばないのもどうなのかな。」
呆れたように戦利品をシャーペンの様に回しながらも、足元に転がる男をつまらない様子で見ていたが、それも飽きたのか唐突に開いた手の指を弾いた。
それを合図にソファの真後ろ、現れたのは2人の男。

左右から挟む様に気絶している男を掴み、足を引きずりながら何処かに連れて行った。
それに見向きもしなかった男が考えるのは戦利品ーーアントメモリを手に入れる前に見た光景のこと。
「けど驚いたなぁ、彼があんな能力を持ってるなんて。原作とはかけはなれた世界だって言うから幼なじみがいても気にしてなかったけど……」
男の脳裏に過るのは、自分とは、同じ存在でありながらこの世界の全てを見下した人物の姿。
無意識に歯を食いしばり、アントメモリを握る手に力が入る。思わず握り潰す寸前で気付き慌てて緩めたが、気持ちまで緩むことはない。
「たった数年とは言え彼を見てきた、今までの姿が偽者とは思いたくないけど。」
おもむろに立ち上がり、ソファの後ろを見ればそこにはーー
「彼を見極めないと……もし奴と繋がってるか、或いは同質ならば……容赦はしない、全力で潰してやる。」
凡そ学校の体育館位の大きさの空間があり、そこを埋め尽くすのは一糸乱れぬ姿で並ぶ〝男〟達の姿。
「それが僕の、〝リバース〟の一角を担うものとしてのせめてもの意地だ、数の力で徹底的に叩き潰してやる‼?」
まだ見えぬ舞台にて男は決意する、対面の時は近い。

夕暮れと灰と星とー４

花咲川、風都に隣接するこの街はａｆｔｅｒｇｌｏｗを含めたガールズバンドが幾つも活動していることで有名な街ーーらしい。

意図的に情報を遮断していたので、俺の中では６年情報は止まったままだ。ましてや当時は駅付近には殆ど行っていないので、駅に降りた際に懐かしさは全く込み上げて来なかった。

しかし今は違う、彼女達がアントドーパントに襲われた現場に案内してもらっている最中だが、その道には覚えがあり懐かしさが込み上げてきていた、のだがーー

「ねぇ、尚冬……大丈夫なの？凄く辛そうな顔してるけど……」

良い意味では無かった、寧ろ懐かしさが込み上げてくるごとに苛立ちや憎悪と言った感情がふつふつと湧いてくるものだから、会って数時間の蘭が心配する位には酷い顔をしているらしい。

因みに呼び方に関しては電車内で下の名前て呼んでいいと許可を得たものなので悪しからず。

閑話休題ーー

「大丈夫だ、仕事には支障は無いからよ。」

「蘭ちゃんはそういう意味で言ったわけじゃないと思うよ？」

分かっているさそれ位は、純粋な心配なのは表情や動作で分かる。それが出来るくらいには探偵をやって来たし、皮肉な事に６年前に思い出した記憶も拍車をかけていた。

因みにだが、今この場には俺以外に蘭とつぐみしかいない。残る３人は件のカイ君のお見舞いーーもとい監視である。

実はカイ君、先程意識を取り戻したとのことで早速動こうとしたと病院から連絡が電車内であり、それを聞いたひまりは駅を降りた途端に病院に向け走り始めた。

巴は慌てて、モカは面白そうだからなんて理由で追いかけて行った。モカだけ不純過ぎる。

そんな訳で２人しかいないのだが、案内だけなら十分だし、ひまり

の目的自体カイ君の無茶防止なので理には適っている。
さて、そんなことを考えている間にどうやら着いたようだ。
「ここだよ尚冬君、私達がアントドーパントに襲われたのは。」
規制線は貼られていなかったが、場所はやや幅広い住宅街の一角だ。周りにチラホラ通行人の姿もあり、アパート等も見られるが街灯も比較的多くあり死角になりそうな場所は殆ど見られない。
どう見ても襲撃には不向きな場所だ、直ぐに警察に連絡が行くだろう。
犯人は元々複数犯だったが、カイ君の活躍で人数が減らされ焦った結果だというのか……例えどのような理由であれ何とも御粗末としか言えなかった。
「しかしある意味カイ君は運が良かったな、特殊な能力があるメモリならこうも簡単にはいかなかったな。」
「電車内で聞いた話だね、確かに言う通りだ。」
来る最中にガイアメモリに関する基礎知識は伝えてある、その危険性も含めてだ。
少なくとも何の訓練もしていない一般人には対抗出来る手段は殆どない、何せ肉体を怪物に変えてしまう代物だ。元がモヤシでも簡単に拳一つでコンクリートの塊を粉砕出来るのだから、その力は危険でしかない。
それに長期の使用は身体を蝕むので早めの回収が一番である。
その為に必要なことをフィリップに出る直前に頼んでいたのだが、まだ連絡は来ない。
さてどうしたものかーーと考えたところで、違和感。
「……」
先程まで見られていた筈の人通りが、途絶えている。そして代わりに至る所から急に感じ始めた視線。
「……索敵振（ソナー）」
２人に聞こえない程度に呟いて使い慣れた〝アレ〟を起動すれば、直ぐに反応はあった。
数にして５、俺たちを既に囲む形で姿が見えない連中は配置につい

ている。
一切気付けなかった、油断なんて無論していない。にも関わらずにこの結果は相手の技量の高さの証明に過ぎない。
舌打ち一つ、それに気付いた2人が俺を見てくるが対応している暇はなさそうだ。
「2人とも動くなよーー来るぞっ!!?」
叫ぶと連中の次の行動は、同時だった。
《アント!!?》

夕暮れと灰と星とー5

聞き慣れた音声が木霊する。
そして俺たちを囲うように現れたのは、予想外であり予想していた存在だった。
「アントドーパント…⁉⁉？けどーー」
「何で5体も居るのっ⁉⁉？」
アントドーパント、逃げたストーカーが再度襲ってくるだろうとは考えてはいた。だから襲撃してくる事に関しては寧ろ好都合だったのだが……
「何がどうなってやがる……」
囲んでいるアントドーパントに少なくとも違いは見られない、問題はこれがアントの能力だったら良かったのだが、明らかに違うと断言できる。
何せ音声は全方位から聞こえた、つまりはメモリ自体が複数あることを示している。
別に量産されたメモリ自体が無いわけではないが、マスカレードより上位のメモリがこうも大量に量産出来るとは思えないし、あくまでマスカレード基準なので、それより上位のメモリを量産するほうがメモリを売る側として効率が良いはず。
しかもだ、こいつらの意識は蘭たちに一切向いていない。狙いは俺らしい。
違和感だけが募る、こいつらはストーカーとは関係が無いと断言できるだけの材料がない。
だが今はまずこいつらの撃退が最優先か……
こいつを使うのは久しぶりだった、かつて大道克己ーエターナルのマキシマムドライブの影響を受け、一時的に〝仮死状態〟になっていたこともあり使うのはフォーゼを助けに行った以来か……
腹部に意識を集中する、すると浮かび上がるように現れたのはメタリックシルバーの装甲をしたロストドライバーとよく似たベルト。

メモリ挿入口に狼の意匠が施されたそれを確認して、次は掌に意識を集中すれば同じように浮かび上がるのはDのイニシャルのガイアメモリ。
「蘭、つぐみ、ここを動くなよ。」
「何で……ってそれ⁉？」
「えっ⁉？」
２人の驚く声が響くが気にしない、メモリに付いたボタンを押すと《デット‼？》と聞き慣れた音声が響く。
そして俺は口にする、自分を変えるその言葉を。
「変身。」
メモリ挿入口にメモリーーデットメモリを挿入しスロットレバーを倒す、すると再び音声が響くと身体を覆う様に足下から装甲が張り付いていく。
そして頭まで装甲が覆い尽くした時、そこにはアントドーパントとは別の異形の姿。
かつてこの姿を見た翔太郎さんは俺のことをスカルと呼んだことがあった。
間違えるのは不思議でもない、何故ならこの姿のモデルになったのは他でもない仮面ライダースカル自身、スカルのデータを元に造られた姿。
全体的に見ればメタリックシルバーに塗装されたスカル、だが頭部はより本物の骸骨に近い意匠となり、胸部には十字架の意匠が、その身体を黒いローブで覆われ姿は宛ら死神だった。
死者の記憶を宿すメモリであるので強ち間違いではないのだが、文句があるとすれば見た目がどう見ても悪役なので高確率で敵と思われることだ。
オーズやフォーゼたちはまだいい、だが酷い時にはライダーキックされかけたことある位だ。
閑話休題。
変身が完了し、驚く2人を尻目に俺はまず真正面にいたドーパントに突撃する。

変身直後の突攻、良く変身に驚くドーパントや敵が多い為に好んで使う戦法、6年前のこともあり尚更使い慣れたもので相手の不意を突き、こちらの有利に持って来やすいのだが。
対してアントドーパントー数が多いので認識順にアント1とするーは不気味に静かに構えを取る、隙をつけなかった、と言うよりそもそも変身に対して何の感情も抱いていない動きにますます違和感を感じるが今更止まれない。
ーーだから更に奇をてらう。
およそ10メートル程の距離を詰めたところで、跳躍。
そのまま空中で体制を変え、相手の胸部を蹴り抜く。
火花を散らし吹き飛ぶアント1、空中で1回転しながら着地、吹き飛ぶ姿を確認しつつも勢い良く背を倒して背後から迫っていた2つの拳を避ける。
ソナー自体はまだ切っていない、故に背後に迫っていたのは気付いていた。
そのまま地面に手をついて、その場で逆さ立ちになりながら独楽のように身体を捻らせ、脚を開いて素早く回転、アント達の頭を蹴り抜く。
回転しながらも残る2体の位置を確認、此方に向かっているのを見つつ、左後方に向けて力を腕に込め、跳ぶ。
まさに変身様様である、腕の力だけで此方に向かってくるアント4の背後に降りたてるだけの筋力を与えてくれる。
意表を今度は付けたのか、慌てた様子で振り返ろうとするがーー
「おせぇ!!?」
ローブの中、〝腰に付けていたナイフ〟の柄を右手で逆手で握り、前に踏み込みながら水平に切り込む。
振り向こうとして無防備な腹部を切り裂き飛び散る火花、のぞけり崩れる体勢。
まだ他の連中とは距離がある、ならばここで確実に1体仕留めるっ!!?
だから俺は紡ぐ、あの言葉を、人間を兵器に作り変える力ある譜を。

「創生せよ、天に描いた星辰をーー我らは煌めく流れ星‼?」
途端、身体に満ちる莫大な力。〝以前〟なら使うのさえ忌避していたが、どういう訳か以前よりも反動は低く、かつ2度目の変身様様事象、変身中に使うと反動はほぼ封殺されるのだ、精々軽い疲労感程度なので使わない理由が無い。
ただしあくまで力が満ちただけで本領発揮とはいけないが、今は充分。
右手を振るう、それだけの行為は強化に強化を重ねた結果、音速を超える。アント4には腕が消えて見えただろう。
その状態で5度、音速を超えた斬撃はアント4を切り裂いた。火花がほぼ同時に煌めいた瞬間ーー
爆散、目の前にオレンジ色の炎が咲く。
ーー残り、4体。

夕暮れと灰と星と－6

まず1体、超過ダメージにより爆散、ドーパント体が強制解除され転がる男らしき人物。

マキシマムドライブではなくても人体の急所に当たる部分に5度の斬撃だ、ドーパントだたので死にはしなくても暫くは行動出来ないだろう。

だから今は残りに集中する。向かって来ていたはずのアント5は今のを目撃した為か、突撃を止めて吹き飛んでいた3体と合流していた。

単体で攻めるより集団で攻めるのを選択したのだろうが、寧ろ好都合。

譜は始まりの一節のみだが、マキシマムドライブと併用すれば4体程度問題無い。

だからデットメモリを引き抜き、腰に着いたマキシマムスロットに挿入。

《デット‼?マキシマムドライブ‼?》

右脚にエネルギーを一極集中、アント1に食らわせた様に駆け出し、距離を詰めたところで跳躍、蹴りの状態を空中で作る。

「喰らえライダーキック‼?」

技名はシンプルに、叫びながらの必殺技は突き出した右脚から全身を覆う様に可視化したエネルギーが現れる、端から見れば宛ら地上に現れた流れ星。

4体はその場から離れようとするが遅い、そんな暇は与えずに4体を連続で撃ち貫いた。

地面を滑るように着地すれば背後で大爆発、立ち上がって背後を見れば地面に転がる人影が3つーー3つ?

「んだと?」

数え間違えていない、確かに3人分の人影……もう1人はどこに?

と言うよりその3人も何か……あれは仮面か?のっぺりとした無

個性の白磁の仮面、３人揃って付けているが、もしや先に倒した奴もか？
いや、今はそんなことは良い、もう1人は一体ーー
「探しているのは私かな？」
「っ⁉？」
変声機を使っているであろう男とも女とも取れない声、声がしたのは蘭たちがいた場所。
慌てて見れば倒れた連中と同じ面を被った黒いローブの存在。徹底して情報を与えないつもりか。
そして奴の足元にはピクリと動かない蘭たちが倒れ、その頭に向けて両手に握られた拳銃がその銃口を向けていた。
「いかに仮面ライダーでもこの状況じゃ何も出来まい、テンプレートな台詞だが言わせてもらおう……動けば撃つ。」
「ちぃ……」
こいつ、一体どこから……ソナーだって消していないのに声をかけられるまで一切気付けなかった。
いや、まず目の前にいると言うのに存在が恐ろしく薄い、意識していなければ直ぐに見逃してしまいそうな程だ。
「しかし流石は仮面ライダー、あっさりとドーパントを倒すとは。いやはや中々どうしてーー」
賞賛、ではない。変声していても分かるほどに滲んだ感情は、警戒。
「ターゲットとは別の転生者とはね、奴がいたんだからおかしなことではないけれど」
「っ⁉？お前ーー」
転生者、その言葉は嫌でも覚えている。何せそいつを言ったのは6年前のーー
「テメェ、何故その言葉を知ってる⁉？テメェもあの糞野郎のーー友希那姉やリサにあんな顔をさせた我王唯一の仲間かぁ⁉？⁉？」

夕暮れと灰と星と―7

忘れもしない朝見た夢の元凶、幸せだったあの時の全てを壊した張本人。

何より大切な居場所だった2人を絶望させた糞野郎、こいつはそいつと同じ言葉を吐きやがった。

このまま逃すわけにはいかない、必ず知ってる情報を全て吐かせる‼?

「……あいつのことを知っていてその反応、どうやらあいつの仲間の可能性はなさそうだね。」

けど、と続けて言葉を告げようとした奴の足元には見たこと無い模様が円形に、3人を包む形で現れる。

「悪いけど本命は別でね、僕の事を追って来たいなら海原灰翔(うなばらかいと)と一緒にここに来なよ、他の3人と一緒に待ってるから。」

「つまて‼?」

そう言って何かを投げ渡してきて、同時に3人の姿は光に包まれ消えた。ソナーでも一切感知できない。

恐らくはゾーンメモリと同じか似た能力、あいつは一体どれだけの能力を持ち合わせているんだ?

「……ここで待ってるねぇ。」

奴の話を信じるなら今投げ渡されたものー―1枚のカードに書かれた住所に奴は居るのだろう。それも病院に向かった筈の3人を含めた5人を人質として。

蘭たちを助けるのは当然だが、海原灰翔とやらを連れてこないことには5人に危険が及ぶだろう、それは避けなければならない。

多分その海原ってのが件のカイ君なのだと思う、このタイミングで関わってくるとすれば彼しかいない筈。

誘拐犯の、仮面野郎の話を信じるならばカイ君もまた転生者ーそれも俺と関わりが高そうな奴。

現段階で分かるのはそれだけ、あとは直接本人に尋ねなければなら

ない。
しかし今は病院に行くのが先決だ、カイ君とやらを迎えに行かなければならない。
奴は本命だと言っていたが此方としては巻き込むに等しいのだ、幾らライダーの力でも引き金を引くより早くは動けなかった、アクセルメモリが使えれば話は別だろうが……
本当に自分の弱さが嫌になる、取り敢えずはカイ君が居るのだろう病院に行かなければ。
ーー数十分後、病院の敷地の前に俺は居た。
仮面野郎が渡したカード、あれにはカイ君の病院も記入してあった。どうもかなりの情報網を持っているようだ。
恐らくは今この瞬間も俺を何処かで見ている筈、厄介なことこの上ない。
また、蘭たちのことは既に翔太郎さん達に報告しているのだが、その際に新たな事実をフィリップに告げられる。
なんと、既に蘭たちをつけ回していた集団は全員捕まっていたそうだ。時間にして俺たちが丁度花咲川に向かう事を決めた時には。
しかもストーカーが言うにはメモリも使用したとのこと、それでも勝てなかったと。
アントメモリが仮面野郎の手に渡ったのはこの時だろうが、そもそもアントメモリは1本しかないとのこと。
ならば先程倒した奴らはなんだったというのか、実はあの後倒した筈の連中全員が消えていた。
もちろんブレイクした筈のメモリさえもだ、あたかも幻のごとく消えたものだから益々分からない。
悪い話は続く、増援を依頼したのだが都合悪く依頼が、しかもドーパント関連のものらしく対応出来ないとのこと。
だから今回は俺一人、しかも他の人間を巻き込む形で5人を助けなければならない。
最悪切り札を切る覚悟をして、まずは受付にーー
「貴方が、奴が言っていた人だろうか。」

唐突に掛けられた声に行動は止められる、誰だろうかと確認してーー絶句。
「急に声をかけて済まない、だがどうしても聞いてほしいことがーー」
見覚えのある、どころではない。
その何処までも優しげな顔立ちを、海の如くに透き通った蒼の両眼、唯一違うのは髪の色が白ではなく黒であるくらいで。
背格好すら記憶の中にある姿と寸分違わないその姿に、思わず口にしてしまった。
「お、前……アッシュか？」
「っ⁉？なんでその名前をーーって貴方は、まさか……」
急に呼ばれた名に驚くのは一瞬、俺の顔を見て次は別の意味で驚愕していた。
まさか、アッシュ……お前だったとは流石に予想できなかった。
「ゼファー、さん……なんですか……」
6年前に思い出すことになった記憶、前世の記憶。ゼファー、確かにそう呼ばれていた。
今ここに、冥王と呼ばれた男と新たな英雄となった男の運命が、ここに交わった。

夕暮れと灰と星と―8

そもそもどうして俺が前世の記憶や能力を持っているのか。
きっかけはデットメモリの初使用時が原因であり、このガイアメモリが内包するのは死者の記憶。
本来であれば死んだ者の記憶や技術を閲覧、学習する程度の力しかないメモリだとシュラウドさんは言っていた。
だが物事にはいつだって例外があるように、無自覚とはいえ転生者、言うなれば前世と言う死者の記憶を内包している人間が使えばどうなるか。
その結果がゼファー・コールレインという、男が歩んだ人生と会得した経験、技術を強制インストールすると言う結果に繋がったわけだ。
そうして出来上がったのは本来なら存在しない星の力を宿した、詩人尚冬という1度も人を殺したことがないのに殺人経験豊富な探偵である。
閑話休題。
「まさかこんな形であの世界の知り合いと会うとは思いませんでしたよ。」
「そりゃ俺もだ、蘭たちから起動詠唱（エンゲージ）を聞いた時には警戒したが、まさかお前だとは思いもしなかったよ。」
出会った時から更に時間は経過していた、現在俺とアッシュ、もとい海原灰翔が居るのは住宅街の中―屋根の上を風の如く疾走していた。
星の力を振るうもの―星辰奏者（エスペラント）の力を解放した身体能力ならばこの程度は造作もない、地面を走るより障害物も無いので目的地に早く着ける。
因みに大怪我を負っているはずの海原だが、別に完治しているわけでもなく両手には包帯が隙間無く巻いてある、服で見えない部分はガーゼ等がされているそうだ。
この状態でも痛がる様子が無いのはこいつの星辰光のものだろう

……ゼファーとしての記憶からどうも嫌悪感が溢れそうにはなる、アッシュを知っている分本人を嫌うまではいかないが。
「てか蘭たちと同い年なら今の俺ともタメだろ？敬語なんざいらねぇよ。」
「了解、しかしまさか蘭たちが探偵に依頼していたなんてね。」
「誰かさんが無茶しないようにだとさ、そんな大事な思いを俺は守れてやれなかった訳だが……」
あぁ、本当に情けない。油断などしてなかったのに依頼人を危険に晒すことになってしまった。
更には依頼の理由であった男まで巻き込むことになってしまった、おやっさんに顔向できやしない。
「……ひまりだなそんなこと言いそうなのは。本当にこういった件に関しては昔から信頼が無いよ。」
「……恨まねぇのか、大事な連中なんだろ？」
恨み言は言われる覚悟はしていたのだが、予想に反して海原は苦笑いを浮かべるだけ。
「俺にそれを言う資格はないよ、星辰光（アステリズム）を使うべき盤面で出し渋った挙句にこのザマだ、寧ろ皆の依頼を受けてくれて感謝してるくらいさ。」
出し渋った、と言うのは恐らくはストーカーが変身したアントドーパントとの戦いだろうが、実は疑問に感じていたことがある。
「寧ろよく使えたな。この世界にはアダマンタイトやオリハルコンは無いだろう？星辰体だけはあの世界と比べて少なくてもあるみたいだが。」
そもそも星辰奏者が能力ー星辰光を使うにはアダマンタイトと言う鉱石が必要不可欠。それを媒体に能力は発動出来るのが前世の、新西暦の法則だった。
そしてある意味その上位互換出会ったのがオリハルコン、神鉄なのだが、あれは使い手を選び過ぎた。
「……それについては多分、予想に過ぎないけどどうも星辰光自体が変化しているように感じるんだ。」

「あぁ、やっぱりそっちもか。」
「そっちもか、って詩人も？」
どうやら俺だけの感覚ではないということか、実際に俺の星辰光にも変化が見られるのだから。
と言っても変化はあくまで基準値と出力の底上げだ、ゼファーの際に心底嘆いた一点特化型であることはなんら変わりはない。扱いやすくなり前より気軽に使えるくらいか。
そして海原と俺には現状ある大きな差が一つある、俺が星辰光を扱える最大の理由が。
「尚冬でいい、それに俺にはこれもあるんだぜ？」
そう言って背中からナイフを取り出して見せる、流石に移動している最中に投げ渡す様な真似はしない。
初めは訝しげな眼差しを送っていた海原は、しかしあることに気付いて目を見開いた。
「それはまさかアダマンタイト…？いや違うそれだけじゃない……⁉？」
「さっすがアッシュ。そうこいつはーーアダマンタイトとオリハルコンの合金製ナイフさ。いやーデットメモリ様々ってな。」
詳しく詳細を言うならばデットメモリの特性を発揮したものだ、デットメモリは死者の記憶を読み込むだけではない、読み込んだ記憶にある物質を再現出来るのだ。
いや正確にはそういう風に初めから作られていたわけではない、ゼファーの記憶を読み取った際に恐らくは極晃星（スフィア）に触れてしまった為に起きた機能拡張である、というのがフィリップの見解だ。
このお陰で使い慣れた形で媒体を手に入れられた、しかも合金のお陰か多少の使いにくさが増した（今は慣れたが）が出力と性能もまた増した。無論それだけではないが、今は良い。
「あくまで勘だが、お前もデットメモリの恩恵を受ける筈。今から大事な幼なじみを助けるんだ……少しは戦力を整えないとな、また爆発、いや暴発なんてシャレにならん。」

「っ……気付いてたか、済まない助かる。」
互いの能力に関しては移動し始める前に話し合っている、記憶にあった能力と差異は無かったが、それだけにしっかりした媒体があれば暴発は起きなかっただろう。
何せアッシュの能力は強力だ……かつての英雄様を思い出してしまうのは、アッシュが悪いわけではないので抑えよう。
「ーーっ、見えてきた……!!?」
「あれか……」
さて、話をしながらもようやく見えてきた目的地。見た目は……倉庫、か？
住宅街から少し離れた位置にあり、かつ奥に入らなければ見えない絶妙な位置にある建物、そこが俺たちの目的地。５人が捕らえられている場所。
入り口らしき巨大な搬入扉は重厚な金属で出来ており、開けるには一苦労しそうだが、こじ開ける必要は無さそうだ。よく見れば出入り口はその隣にある。
「……海原、ほれ。」
「カイで良い、皆そう呼ぶから。」
海原、もといカイにデットメモリを投げ渡せば躊躇無くボタンを押した。
響く電子音、直後光の幕がカイを覆ってってーー
「は？」
予想とは違う変化に驚く中、光の幕は直ぐに消えた、そして中から現れたカイはーー
「……これまた、懐かしいな。」
ゼファーとしてもアッシュとしても、実に見覚えのある姿にーー軍事帝国アドラー率いる星辰奏者部隊の制服を着込み、手には懐かしい太刀が握られていた。
「予想外の展開だよ、こいつにはまだまだ秘密がありそうだ。」
俺の時はナイフが出ただけだった、いや実は別にもあるが服装が変わったことはなかった。

返してもらったデットメモリを懐に入れ、カイと共に入り口を見据える。何にせよ準備は出来た。あとはーー

夕暮れと灰と星とー9

蘭サイド

２人が入り口に着く十数分前ーー

ーーん、蘭ちゃんーー

誰かが私を呼んでいる、この声はつぐ、だろうか？

慌てているようだけど、どうしたのだろうか？いや、そう言えば私は何をしてーー

唐突に、フラッシュバックされるある光景。

尚冬の戦いを後ろから見守っていた際に、男か女か分からない声が後ろからして。

慌てて振り返ったらプシュッと気の抜けた音と共に眠気が急速に思考を支配して、それでーー

「ごめんね、蘭……」

一瞬だったが確かに、愛しい人の声がした。そこで目の前が真っ暗になったのだ。

そこまで思い出した私は漸く目を開けた、ぼんやりとした視界に初めに飛び込んだのは今にも泣きそうな大切な幼なじみ達。

つぐ以外の３人がどうして居るのか、カイの見舞いに行った筈なのに。

「蘭ちゃん…‼？良かった目が覚めて……」

「つぐ……」

泣き出しそうなところ悪いが、状況がまるで掴めない。どうやら私はえらく座り心地の良いソファーに座らされていたようだ。

目だけを動かし周りを見る、牢屋、だろうか？ドラマとかで見るような黒い鉄格子の中に私達は居るのが現状らしい。

そして鉄格子の外側、そこには見覚えのある姿が私と同じものと思われるソファーに座って、此方を向いていた。

「あんたは……」

全身ローブで包んだ仮面の存在、男か女か分からない姿は不気味さと恐怖を自然と感じさせる。

どうやってここに連れてこられたのだろう？近くには異形の姿で戦っていた尚冬がいた筈。
私の疑問を感じたのかはわからないが、仮面の存在は無言で立ち上がった。
「まずは謝罪を、無理矢理つれてきて申し訳ない。目的が叶い次第無傷で解放することは保証しよう。」
変わらず変声したままなのが不気味だが、やたらと丁寧な口調で気になるワードがある。
「目的って何なんだ⁉？私等を誘拐してまで叶えたい目的って‼？」
巴がそう叫ぶが仮面は動じる様子を見せない、いや、姿が見えないので実際はそう感じるに過ぎないが。
けど、私達を誘拐してまで果たしたい目的か……
少し考えて、どうしようもなく嫌な予感がした。私個人ならまだしも、このメンバーを揃えて叶えられそうな目的、それが人に関することならその目的と合いそうなのは1人しか居なくてーー
確認のつもりでひまりを流し見してみれば、私の予感を裏付けるかのように顔を真っ青にして口元を両手で覆っていた。
「僕の目的か、それはーー」
答えようとした、その時、轟音が響き渡った。
「きゃあああぁぁ⁉？」
「な、何だっ⊠」
つぐ達と思わず悲鳴を上げてしまう、巴だけは轟音をした方を驚き、慌てながらも見ていた。
けど驚きは困惑へと変わっていった、まるで有り得ないモノを見たかのように。そして同時に私の予感が当たっていたことを示す様にーー
「か、カイ……？」
「あっ……」
信じたくない呟きと、モカにしては珍しい惚けた様な声を聞きながら移した視線の先にはひしゃげた金属の扉が床に無造作に転がり、扉があった場所に居たのは、気を失う前に見た異形と化した尚冬と、見

た事もない軍服の様な格好で左腰に帯刀した6人目の幼なじみの姿があった。
蘭サイド終了。
尚冬サイド。
入り口に着いたはいいが、中では5人を攫ったあいつが待ち受けている可能性がある。
扉を開けた瞬間に攻撃されたら対処は難しくなる、なので派手に入るとしよう。
カイとその旨を相談した結果、俺が変身して扉を蹴り飛ばすことになった。
素早く変身して扉を回し蹴りの要領で蹴りつける、変身による強化でただの蹴りでも金属の扉を変形させる位は容易だった。
扉が無くなった入り口を潜れば、視界に映ったのは無駄に広い割には殆どものがない空間に、鉄格子とその中に居る蘭達の無事な姿、そしてーー蘭とつぐみを目の前で連れ去った仮面の存在が此方に身体を向けていた。
「……先にあいつらを安心させてきな、こっちは話し終えるまで何があっても抑えてやる。」
「すまない、ありがとう。」
顔をカイに向けずに告げれば駆け足で鉄格子へと向かっていく、鉄格子の側に着くまでの間、奴は動く素振りも見せはしない。
「あいつが目的の割には何もしないんだな。」
「なに、話し合う時間くらいはあげるさ。ここに来た以上はそれ位の余裕はあるしーー」
マントの中から唐突に腕が伸びる、手に握られているのはAのイニシャルが書かれたメモリ。
《アント!!?》
機械音が広い建物内に木霊する。奴が変身すると同時に駆け出そうと構え、その手からアントメモリを離し地面に落ち始めたことに思わず困惑し、動き出せない。
その間にメモリは垂直に落下、乾いた音を響かせ床にぶつかりーー

はせずに逆に音も無くまるで水に落とされたかのように沈み、消えていった。
余計に強まる困惑は、奴の背後に広がる空間の床に幾何学模様が描かれた円が無数に現れたことに警戒へとすり変わる、そしてーー
「っ……何の冗談だ？」
もし変身してなければ引き攣った笑みを浮かべていただろうと思いながら、円から出てきたそれらを見てナイフを取り出し構える。
出てきたのはアントドーパントではない、むしろアントドーパントであって欲しかった。
アントメモリを落としたのはこれに利用するためだろう、見た目はアントドーパントをベースにより生物感が増している、頭部は生物のアリであり、ギチキチと顎を鳴らしてこちらを見ている。
大きさは目算で3メートル弱か、それだけならアントドーパントより多少は脅威だが、あくまでそれだけだ。
ーーそれが単体でなく、空間を埋めてくさんばかりに蠢いているのだから、冗談であって欲しかった。
「先の戦闘て得られた情報を早速還元させてもらったよ。この程度の強化では君には不足だろうが、そこは数で補わせてもらうーーでは、いけ。」
言うが同時に仮面の姿が消える、同時に動き出す異形達。
何処かで高みの見物か、だが今は連中を処理するのが優先か。
「創生せよ、天に描いた星辰をーー我らは煌めく流れ星。」
だから今回は初めから使う、但し前回と異なり起動詠唱だけでは終わらない。
確実に奴らを殲滅する為に、己が星を輝かせよう。
「輝く御身の尊さを、己はついぞ知り得ない。尊き光の破滅を祈る、傲岸不遜な畜生王。」
輝く勝利を嫌い、光の者達を憎んだ、人狼の星。
「人肉を喰らえ、我欲に穢れろ。どうしようもなく切に切に、神の零落を願うのだ。絢爛たる輝きなど一切穢れてしまえばいいと。」
何人もの生命を刈り取り、日銭へと変えていった力で今度は誰かを

守ろうとするのは滑稽に見えるだろうが、知ったことか。
「苦しみ嘆けと顎門が紡ぐは万の呪詛、喰らい尽くすは億の希望、死に絶えろ死に絶えろ、全て残らず塵と化せ。」
だからーー全てを刻んでやる。
「我が身は既に邪悪な狼、牙が乾いて今も疼く‼?怨みの叫びよ天に轟け、虚しく闇へと吠えるのだ。」
聞けよ化け物ども、闇に響く人狼の咆哮を‼?
「超新星《メタルノヴァ》ーー狂い哭け、罪深き銀の人狼よ‼?《シルヴァリオ・クライ》」
そうして発動した星の力、人によっては1人の人間を一個中隊クラスを相手に出来るだけの力を身に宿して、化け物達へと飛び掛った。

夕暮れと灰と星とー１０

灰翔サイド

時間は灰翔が牢屋に近付くまでに遡る。

ゼファー、もとい尚冬に一旦相手を任せて俺は５人が囚われている牢の前まで駆け寄った。

……良かった、見た限りで傷付いた様子は見られない。丁重には扱われていたのか、牢の中にはソファが人数分見られる。

「カイ…‼？お前怪我は…⁉？」

「巴…大丈夫、今は事情があって痛みは無い、万全な体勢で動けるよ。」

事情と言うのは今のアドラー軍服のことで、移動中感じていた痛みは今はまるで感じない、まるで一時的に痛みが消えたみたいに。

実に不思議な現象だが、今は気にする暇はない。５人の無事を確認した以上は俺も戦わなければ。

「ヒィ⁉？な、何あれ⁉？」

「つぐみ？ってあれはーー」

短い悲鳴を聞き、つぐみの視線を辿ればそこには無数のアリの怪物がいた、間違いなく仮面の存在が差し向けたのだろう、姿が見えない。

しかしある姿も同時に確認した、起動詠唱を歌う尚冬の姿。確かーー仮面ライダーデット、だったか。

歌い終えた尚冬は全身に白銀の光を纏い、そして異形へと駆け出した。

速い、星辰奏者としての能力だけではなく変身の影響もあるのか、瞬きも出来ない一瞬で一体の怪物の懐に潜り込んでいた。

怪物は一切気付いていない、余りの速度に反応が追いついていないのだろう。

その隙を彼が見過ごすはずも無く、ナイフを構えた右腕が霞む、そして消えたかの様に今度は別の個体の懐に。先程まで側にいた怪物は、次の瞬間に光の粒子となって霧散する。

最早それは戦闘とは言えない、死の瞬間ですら相手に気付かせずに仕留めるのは暗殺であると言っていい。星の記録を通してデータで

しか知らなかった人狼（リュカオン）の在り方がそこにはあった。
そう考えている間に瞬く間に敵の数が減っている、前世よりも遥かに高い戦闘力だ、漸く気付いた怪物達が咆哮しながら尚冬へと殺到していく。
しかしそれではあまりに遅い、身体を駒のように回転すれば彼に迫っていた怪物の首が宙を舞い、体と共に霧散する。
このままでは全て倒されそうだ、奴の目的は俺なのだからそろそろ参戦しなければならない。
コート状の軍服を翻し、帯刀していた刀をゆっくり鞘から引き抜いた。
あのメモリから出て来た刀だが、やはりというかアダマンタイトとオリハルコンの合金に間違いない。見ただけなのだが直感でそれがわかった。
これなら充分に媒体として機能する、刀を正眼に構え、起動詠唱を口にしようとしてーー
「カイ君……」
涙声で最も聞き慣れた声に止められ、振り向けば今にも決壊しそうな涙を目尻に貯めたひよりが居た。
「戦うの……？尚冬君に任せたらダメなの？だって……カイ君酷い怪我してるんだよ……今収まってても治った訳じゃーー」
「ひより。」
止まりそうにない、それこそ内に秘めていた想いを全て吐き出される前に止める。
それを聞くべきなのは今ではない、ここから抜け出して大切な〝いつもの日常〟に戻ってから聞くべきだ。
「任せるわけにはない行かないんだ、奴が指名したのは俺だしみんなだって奴は巻き込んだんだーー大切な幼なじみに手を出されて黙っていられるほど、俺は寛容じゃない。話し合いで済めばそれが一番だけど、今はもうその時は過ぎ去っているから。」
話し合いの大切さは誰よりも知っている、アッシュと言う英雄が何より大切にしていた訳だし、その実績は烈奏にして救世主、自らの半

身との話し合いを成功させたことから、話し合いが如何に大事かは分かっている。
　でも今示すべきは武であり、今出せる全て。
　半端では終われない。
「それにこの力に関してはいづれ皆にするつもりだったのが今になっただけのことさ。だから約束する、ちゃんと俺はひよりの、皆の居る所に帰ってくるよ。その時には全部話すよ、今まで話せなかったこと全て。それじゃあダメかな？」
「……つぐの家のケーキもつけてくれなきゃ、やだ。」
「勿論良いよ、つぐもよろしく。じゃあ……行ってくる。」
　改めて踵を返し連中を見据える、見た感じ既に全体の３分の１は削られている、このままじゃ本当に出番が無さそうだ。
　目を閉じ気持ちを集中させる、負けられない理由を改めて認識し手に力が篭る。
　その時だーー
『お前は何も変わらないなアッシュ、かつて半身だった者として実に嬉しく思う。』
　声が頭に響く、誰の声なのかなんて考える必要はない。
　だがどうして今その声が聞こえるのか分からない、確かにウルトラトンチキな存在ではあったが今の自分は生まれ変わりだ、半身は既に内には居ないのに。
『疑問に思うだろうがそれはいつか会えた時に話そう、時間はないのでな、一方的にことを済まそう。』
　言い終わった直後、胸の内に暖かい何かが灯ったのが分かった。例えるなら優しい太陽の様な暖かさが。
『さらばだアッシュ、今のお前の輝きを直接見れないのは残念だが、いづれ出会えた時に魅せてくれ、今のお前の名と共に。』
　それ以降、声は聞こえなくなった。しかし胸の内にある暖かさは残っている。これが何なのかは何となく分かる、だから有効に使わせてもらうとしよう。
「ありがとうヘリオス。また会える日まで楽しみはとっておくよ。さ

てーー」
今度こそ歌おう、かつて天駆翔（ハイペリオン）と呼ばれた時の歌を。
今度こそ、間違えを起こさずに。
「創生せよ、天に描いた星辰をーー我らは煌めく流れ星。
愚かなり、無知蒙昧たる玉座の主よ。
絶海の牢獄と、無限に続く迷宮で、我が心より希望と明日を略奪出来ると何故貴様は信じたのだ。
この両眼を見るがいい。視線に宿る猛き不滅の焔を知れ。
荘厳な太陽を目指し、高みへ羽ばたく翼は既に天空の遥か彼方を駆けている。
融け墜ちていく飛翔さえ、恐れることは何もない。
罪業を滅却すべく闇を切り裂き、飛べ蝋翼（イカロス）ーー怒り、砕き、焼き尽くせ。
勝利の光に焦がされながら、遍く不浄へ裁きを下さん。
我が墜落の暁に創世の火は訪れる。
ゆえに邪悪なるもの、一切よ。ただ安らかに息絶えろ。
超新星ーー煌翼たれ、蒼穹を舞う天駆翔・紅焔之型‼？（マークブレイズ・ハイペリオン）」
直後、右眼は金色に輝き、刀身に焔が宿るーーそれがかつての姿。
しかし今は違い、刀身は紅く輝き焔を発していない。それは決して星辰光が不完全に発動したわけではない、別の理由があった。
「おおっ‼？」
掛け声一つと同時に飛び出す、駆け出した瞬間に足元が爆ぜ、その爆風を利用した結果、尚冬に負けず劣らずの速度で化け物の懐に入り込み袈裟斬りを放つ。
その一閃は容易く化け物の身体を切り裂き、身体は斜めにずれ落ちながら消滅する。その切り口は焼き焦げた跡が残っていた。
炎熱付加能力、同じ名称でありながら転生したあと得た経験から変化した海原灰翔の新たな星辰光。
焔の代わりに収束した熱を刀身に宿した斬撃の威力は以前と決し

て劣らず、細かな調整が行いやすくなりより負担が減り、長時間の戦闘も可能になった。
何よりもその特徴は精神面に現れており、かつての英雄の様にただ前に突き抜けていく精神性は無くなった。
代わりにあるのは幼なじみと育んだ暖かな思い出と、当たり前の日常を護りたいと言う意思があり、それこそが能力の原動力となる。
「せやぁっ‼?」
返す刀で刃を振り抜く瞬間に収束していた熱を解放、爆発的に焔が刀身から溢れ出す。
放たれた一閃は焔を纏って飛ぶ斬撃として解放され、化け物を纏めて包み灰へと還る。
直ぐに熱を再収束し化け物の間を真正面から突き進む。進むごとに化け物を斬り伏せながら、進んだ先に居たのは別の化け物の首を飛ばした尚冬の姿。
背中合わせに移動すれば尚冬もそれに合わせ、結果お互いの背中を預ける形となる。
「充分に話せたか?」
「そりゃもう、自分の懐が寒くならないことを祈るばかりさ。」
「殺伐としたもんよりマシだろうに。んじゃまぁーー残りをやるか。」
「あぁ‼?」

夕暮れと灰と星と―11

人狼の牙が的確に生命を剥ぎ取り、焔が灰も残さず焼き払う。
それを繰り返し10分余り、既に化け物は5体にまで減っていた。
カイが戦闘に参加した結果、破竹の勢いて化け物は殲滅され、かつ2人にはろくなダメージすら負っていない。
「らぁ‼?」
「はぁ‼?」
そして残る5体も纏めて薙ぎ払われ消滅、化け物達は全滅した。
その様子に唖然とする4人と、あまり反応は無く祈る様に2人を見守るひまり。
そんな5人に気付く様子はなく、静かに辺りを見渡す。目的は他ならない仮面の存在。
「おい全て片づけたぞ‼?どうせ何処からか見てるんだろ‼?さっさと姿を見せろ‼?」
挑発も込めて辺りに向け叫んでみる、これで現れるなら御の字と考えてーー
「うん分かってる。お見事だよ、あの程度では話にならないようだね。」
化け物が出現した円が再び現れ、そこから姿を見せる仮面の存在。パチパチと軽く拍手をしながら2人に顔を向けている。
「では最後はわたしと戦ってもらおうか、2人同時にかかって来て構わない。」
挑発的で傲慢と言える言葉を告げた直後、仮面とコートが先に倒した化け物同様に光となって霧散する。
姿が変わった、無機質な仮面は頭部を覆うヘルメットに代わり変わらず表情は伺えず、コートの下は黒のスーツでその身体つきは細いが華奢な雰囲気はしない男性で、その手には2本の脇差しが握られている、相当に使い慣れているのか隙はまるで見られない。
ーーだからこそ敢えて奇襲を仕掛ける、姿が変わった瞬間に音を立

てることなく奴の背後に回り、殺すわけにもいかないので右手に握り締めたナイフの峰を叩きつけようとして。
「あぁ、同時にとは言ったけど誰もこちらが1人とは言っていないぞ？」
男の間に割り込んできた存在に防がれてしまう。
その事に尚冬は驚く事なく、寧ろ予想通りだと身体を素早く捻り回転蹴りを放つが、そいつは男と共にその場を飛び退くことで避けられた。
その正体はまたしてもアリで、そのフォルムは今までで一番洗練されており完全な人型、光を反射しない濃い黒の身体は不気味な威圧感がある。
取り敢えず今の段階で分かるのは、今までのアリの中で一番危険だという事ぐらいか、静かにナイフを構え直した尚冬は今度はアリめがけ駆け出し、姿が消えるのとほぼ同時にアリもまた姿を消した。
その後連続して響き渡る金属音を聞きながら、カイと男は静かに武器を構える。
「彼が参号の相手をしてくれるなら好都合、さぁ……君の力を確かめさせてくれ。」
「それでみんなが助かるのなら……だから、いくぞ。」
構えたカイの刃が再び紅く発光し、それを合図に2人は同時に駆け出し、互いが互いの距離に入った瞬間に刃を振るう。
「オオォ‼？」
「シャアッ‼？」
交差は一瞬、赤い火花が空中で弾けるが一度ではない、振るわれた刃が紅い軌跡を描き、それを打ち消すように振るわれた二つの煌めきが衝突し新たな火花が散る。
「ゼァァ‼？」
それだけで終わらない、振り返りざまに刀身に圧縮していた熱を解放、膨大な焔となって男に襲い掛かり、飲み込んだ。
それを見てカイは構えを崩さず、焔を見据える。あれを食らっても無事だろうとどこか確信があって。

それが正しいと、焔の中より両手の刃を回転させ焔を遮りながら突撃してくる男に目を細め鋭くし、構えた刀に再度焔を宿して斬りかかる。

火花がまた宙を舞う、時間経過と共に増えていく赤い赤い火花はそれだけ激しく打ち合っていることを示しており、それに対してカイの内で疑問が膨らんでいく。

（こいつの能力は一体なんだ？あまりに不可解なことが多過ぎる。）

それは男が使っている能力について、あまりに能力発動中と思われる状態が多過ぎて判断が出来ないでいた。

本人や化け物が使っていた空間移動、百を超える化け物を呼び出したことから召喚系、更に尚冬から聞いた同じメモリを複数使っていたことからコピー能力と少なくとも3つは能力が考えられる。

それだけじゃない、星辰体を用いた能力だからこそこのアダマンタイトとオリハルコンの合金製であるこの刀はは耐えられるのであって、普通なら数千度に達する焔と打ち合って〝一切の刃こぼれや融解しない〟時点で刃自体に何かしらの能力が付与されているとーー

（って、付与……？）

打ち合いながらも感じた疑問、それが一体なんなのか、手を止めずに男を隈なく注視する。

刃だけではない、男が着ている服は一切の燃えた跡すらない、顔を覆うヘルメットも同様だ。あまりにも不自然な位に。

それだけじゃない、尚冬と今も戦うアリの参号とやらは高速振動する刃や振動を与える拳打を受けて、一切の傷や怯む様子も無い。まるで振動を受けていない様子だった。

（……成る程。そういうことか。）

それを見て、合点がいった。全てをとまではといかなくてもある程度は分かった。男の能力がどういうものかを。

だとすれば厄介だ、〝同種の能力を使っていたからこそ〟その能力の厄介さは知っている。

しかしだからこそ、付け入る要素があることがある意味勝利に繋がるのだと理解する。

その為にはまず行動して示したのは、男を力を込めて弾きながら後方に飛び距離をとること。
それに対して男の動きが止まる、単に警戒してのことか改めて構え直していた。
寧ろカイには好都合、刃に宿した焔を現段階で出来る最大の熱量まで上げながらも状態を維持したまま、腰を落とし刀を水平に構えた。
そしてイメージするのは1人の姿、誰よりも近くにいた半身の大元となった男、鋼の英雄と呼ばれた男が能力を発動した姿。
かつての自身は消えてしまったかの英雄を蘇らせるために用意された贄だった、だからこそ鮮明にイメージ出来る。
刃に宿る熱量は焔から光へと変わり始める、それは悪の一切を滅ぼす雷霆の一撃、その摸倣。
刹那、身体を砕く様な激痛が走るが気合いで耐える。なんてことはない、かつてもやっていたことなのだから。
「これはっ…!?参号、僕の後ろに!!?!!?」
異変に気付いたようだが、一手遅い。
気合い一閃、放たれた一撃は光の奔流となり瞬く間に男を飲み込んだ。

夕暮れと灰と星と―12

「……どこぞの英雄様の一撃かよ……」
仮面が参号と呼ぶ怪物が、奴の言葉に従い離れていったため、尚冬もまたカイの側まで戻り、目の前で起きた光景に昔を思い出して装甲の内側で顔を歪める。
「流石に放射能まではないですけどね。」
「あったらマズイだろう、それに……身体は大丈夫か？模倣とはいえど、あいつの一撃は……」
前方を見ながら告げる、オリジナルにこそ届かなくても強力な一撃はカイの目の前を高過ぎる熱量で焼いていた。地面のコンクリートが軽く融解している部分がある。
そんな熱量の一撃に男がいた場所には白煙が上がっている、今ので終わりとは2人は一切思っていない。
前世の経験からくるものではあるが、同時に晴れていく白煙の中から見えてくるものがあるからだ。
人影、ではない。現れたのは壁だ。いやーー壁のようにしか見えない巨大過ぎる日本刀、カイの予想通りならそれは……
「脇差をそういう風に使うなんてね、大方巨大化の能力を付加したってところかな。」
唐突に日本刀が消える、その背後から無傷ではないが五体満足で仮面と異形が姿を見せる。
「……その口振りだと、わたしの能力が分かったみたいだね。」
「確証は無いけど……差し詰め《複製と付加（コピーアンドペースト）》ってとこだろ？であれば今迄の状況もある程度の説明がつく。」
複製と付加、成る程と尚冬は心の中で納得する。カイの予想通りなら今までのことが説明が出来るからだ。
複数のアントメモリがあることも、あの化け物の数も、そして今の一撃を受けて五体満足でいられたのも、能力を遺憾無く駆使した結果ならば納得がいく。

「……満点まではいかなくてもある程度は正解だ、確かにわたしの能力は君が言う《複製と付加》に類似したものさ。だからこそ出来た芸当、しかしーー君達を相手するには今出せる全力では足りないか。」
けど、と続けながら左腕を水平に伸ばし、切っ先がこちらに向いていた、手にしていた脇差を手の中で半回転させてーー
「使える手はまだある、だから最後の確認でーージョーカーを切らせてもらう。」
背後にいた参号の胸に、堅い装甲があるとは思えないほどあっさりと、音も無く突き刺した。
「っ、てめーー」
奇行とも取れる行動に数瞬呆気に取られたが、直ぐに気を取り戻して仮面を止めようと踏み出して、一瞬光が視界を覆ったが気にせずに一息に距離を詰めナイフを振り下ろした。
しかし手に感触はなく、代わりに強烈な衝撃が腹部に走り、２度ほど地面をバウンドして５人が居る牢屋の脇を勢い落とさずに通り過ぎに壁に衝突した。
「がああぁぁぁぁ⁉？」
身体が悲鳴をあげる、変身中は一時的に肉体をデータ化するメモリ系ライダーだったのは不幸中の幸いか、生身があれば内臓が幾つか損傷していた可能性が高い。
しかし痛みがないわけではなく、思わず声を上げるも尚冬は壁から離れて自分を吹き飛ばした相手を見据える。
「それが奥の手……まさかの融合か……」
「正確には強化装甲に変化させた参号を纏っただけさ、最も単純な強さは２倍どころじゃない。」
仮面の姿は本人の言うように参号を装甲にして纏ったような姿ーー有り体に言えばまるで仮面ライダーだった、蟻をベースにしたその姿は生物感があり、機械的な要素は頭部以外にはあまり見られない。知り合いの所でデータのみ見たアナザーアギトというライダーが一番造形的に近いだろう。

そして強さは2倍どころじゃないというのも本当だろう、少なくとも反応が難しい速度の一撃を放ってくるのだから。
また、その姿からあれをアントと呼称するとしよう、最早仮面ですらないのだから。
その姿が唐突に炎の柱に包まれる、行ったのはカイだが少し息が上がっている。模倣とはいえ鋼の英雄の一撃だ、相応に体力を削られている。
その中で放たれた炎は少なくとも直撃すれば
生身なら灰すら残さないだろう、しかしーー
「温い。」
「くぅ……⁉?」
その一言で炎は消し飛び、アントはカイとの距離を一瞬で詰めて拳打を弾丸の如く放つ。ぎりぎり反応出来たそれをなんとか刀で捌きながらも、再度炎を刀身に宿す。
体制を整えながらも拳と打ち合わせる為に刃を振るうが、予想通りの光景が広がる。
立て続けに響く金属音、しかし炎の刃と打ち合う拳は一切焼ける事は無い。まるで炎なんて初めからないかの如く、打ち合う拳に炎はまるで意味を成さない。
「炎熱無効か……⁉?」
「正確には耐熱耐性付与、一定の温度以下なら炎はこの外装には意味を成さない、そしてーー」
唐突に打ち合いをやめ、その場から背後に跳ぶ。
そして空中で後ろへと身体を反転させながら振り上げた右脚は、音も無く振り下ろされた高速振動したナイフと甲高いを音を立ててぶつかり合う。
「耐振動性もある、ジョーカーは伊達じゃない。そう直ぐに君達に有利な状況にはならない。」
「ちぃ。」
衝突は一度、2人は距離を取り形的にはカイと尚冬がアントを挟む形になるが、正直有利とは言えない。

「成る程、確かにジョーカー、切り札とは言ったもんだ。……お前の能力、恐らくだが制限があるな？可能性としては付与数、１つの対象に対して付与出来る能力や耐性は限られてんだろ？出なければあの瞬間、カイの溜め込んだ一撃に参号とやらをテメェの背後に下がらせる必要は無かった筈。」

あくまで推測に過ぎないが、そう考えれば納得できる理由もあった。

夕暮れと灰と星とーー13

「それを一時的とはいえ解消したのがジョーカーって訳だ、その耐振動性は参号に付与されてたんだろ？参号を装甲として纏ったことでお前もその恩恵を受けられたわけだ。」
「……だとしたらどうする？少なくとも今の君達には充分に対応出来ている。君達の能力は強力だが、対策出来ればそう怖いものではない……何か策があるとでも？」
挑発……いや、単に確認か。アントとしても俺たちが今の状況に手一杯とは考えていないようだ。
実際合っている、現にまだマキシマムブレイクだって使っていない。単に使わずとも星辰光で対応出来てきたからであり、それで対応が難しくなってきたならば別の手段を取るだけの話だ。
別段このままでも対応は出来るのだが、敢えてアントの考えに乗る為に、腰に巻いたベルトに備え付いていたものーー長方形のケースから見慣れた形のそれ、メモリを取り出し、スイッチを押した。
《ピリオド‼？》
そのまま両腕にある内の右腕側にある、ベルトとは別のメモリ挿入口にメモリを入れれば、再度流れた機械音と共にデットしての姿に変化が生じる。
金属製の、途中で斬られたかのように中途半端な形の、青白い光が中央に走るバイザーが　右目側を覆うと同時に冷気が身体から溢れ出す。溢れた冷気は床の表面を直ぐに凍らせていく。
「名付けて、仮面ライダーデット・ピリオドフォームだな。」
何故使えるかは未だに不明な力だが、使えるものは使うだけだ。新たな姿でアントと対峙する。
その際カイの方を見れば、何やら集中し、真剣な顔を俺に向け、口を開いた。
「っ頼む、１８０秒時間を稼げるか！」
その言葉にサムズアップで返す、フォーゼの影響が少しはあること

を自覚している。
何より仲間に頼られたのだ。答えなきゃ男じゃないと、尚冬としてライダーになって戦いながら何度も感じてきた、ゼファーであった時なら考えられない思考に胸が熱くなる。
そしてそのまま駆け出した、その速度は先程変わらないが動きは変則的となる。
「っ⁉？これは……」
「おらぁ‼？‼？」
「クゥゥ⁉？」
先程までは直進的な動きが多かった、が今の状態なら床を氷らせ滑ることで今までとは異る動きで敵を翻弄し、出来た隙をついていくのがピリオドフォームでの基本的な戦い方だ。
無論それだけじゃない、溢れていた冷気を四肢に集中させ連続で正面から打撃を繰り出すが、今度は脇差しを用いて容易く捌かれる。
しかし、それでいい。その理由は脇差しの凍結という形で現れる。
「ちぃ⁉？」
凍結の勢いはあと少しでアントの腕まで及ぶところだったが、その直前で脇差しを破棄され至らない。破棄された脇差しは地面に落ちた際に粉々に砕け散る。
「金属すら凍らせる低温か……それでこそだ。」
感心した様子で告げるアントを尻目に、尚冬は静かに両手を二、三度握っては緩めていた。
（まだ動けるな……本当に使い勝手が悪い能力だぜ。）
ピリオド自体使うのは初めてではないのだが、相性は良いとは言えなかった。少なくとも長時間の戦闘には決して向かない程度には相性が悪い、ましてや出力は記憶にある本来の1割に届けば良いレベルだ。
しかし逆に言えば短時間の戦闘に限れば、相手の意表をつく意味で使えるのだ。そう言った使い道を考えるのは昔から得意だったからこうして使っている、まぁ、正確にはそうしなければならない環境だったからだが。

例えば今の目的は勝つことよりも時間稼ぎが優先、少なくとも今のままなら充分頼まれた時間は稼げる。
そう思った矢先、視界が夕焼けに覆われたー
時間は尚冬に時間稼ぎを頼んだ瞬間まで遡る。
何故カイは時間稼ぎを頼んだのか、それはあるものを少しでも早く知るためだ。
ほんの一瞬ではあったが確かに繋がった、かつての半身から受け取ったのが一体何なのかを。
少し調べればそれがどういうものかすぐに分かった、同時に渡した相手が相手だけに苦笑が溢れてしまう。
（全くあいつは……こういう展開になるのを予想してたのか？）
実際にそれが出来そうな相手なので苦笑で済ませている。流石は気合いと根性だけで星に勝った男（ウルトラトンチキ）だ。
納得したところでカイと唐突に、牢にいる5人に視線を向けた。
大切な幼なじみ達、アッシュとしての記憶を思い出してから一層強くなったのは、この繋がりを決して失わないという誓い。
前世では力の求め方を間違え、結果的に光の奴隷のモルモットにされ、当時の大切な幼なじみを泣かせてしまった。
それが結果的に今に繋がっているとはいえ、その記憶は戒めとして強く根付いている。
だからこそこの戦いは負けられない、海原灰翔としてみんなを守るために今はアントを倒さねばならない。
自分達の能力を対策した？それがどうした？
転生し、戦いから離れた生活を送っていたとはいえ、たかだかその程度対策した程度でやられる程に弱くなった覚えはなく、ましてや灰翔の本質はアッシュの頃と変わりはしない、だからーー
「そちらが切り札を切るのなら、相応の手でやらせて貰おう。終わったら全て話してほしいから、今持てる全力でいく。」
かつての半身から受け取ったそれを、躊躇なく解き放つ。
「かつて抱いた海王星の輝きよ、今一度力を貸してくれ。優しい夕焼けを見るために‼？

超新星ーー海洋よ、想いを繋げ・夕焼之型‼?（マークラインズ・アフターグロウ‼?）」

夕暮れと灰と星と―１４

赤熱していた刃は優しい夕焼けを彷彿させる色へと変わり、金色に輝いていた瞳には海色の光が宿る。

それはかつてアッシュとして至った極地。光と闇のそれぞれの優しさに気付き、大切な者とともにどこまでも歩んで行くことを望み、必要な条件を満たしたからこそ得た海王星の輝き。

極晃星（スフィア）、第４の星。

太陽系の中で最も離れた惑星が、救世主の想いによって世界を超えて現出する。

ヘリオスから受け取ったのは海王星にアクセスする為の特殊なパスと回廊、それにより前世でなければ使えない筈のこれを使うことが出来る。

流石はウルトラトンキチ、やることが規格外だ。

閑話休題。

しかし今のカイには十全に扱うことは難しい。何故ならスフィアに至るには１人ではなく２人の人間が願う事で至れるものだから。

だから今の状態はスフィアではなく星辰光クラスにまで付属性を除く要素は下がっている。

けれどそれはさして問題にはならない、何故ならこの星の本質は付属性にこそある。

夕焼け色の刃から炎が吹き出す、そのまま切っ先を背後に回すと同時に炎を切っ先に集中して激しく噴射、その勢いはロケットの噴射のようで、瞬く間に尚冬と拳打を交わしていたアントとの距離を詰める。

ニュークリアクラスター、アッシュが使っていたものを再現して詰めた距離を余さず活かし、振り下ろされた炎の刃を咄嗟に気付いたアントは防御態勢を取る。

そして衝突、激しい金属音が鳴り響く。

（バカなっ⁉？）

未だ見えないアントの素顔が驚愕に歪む、金属音は刃と装甲がぶつかったからではない、どういう原理なのかすら不明だが炎と衝突し、金属音を発生させた。
だが、異変は終わらない。
「ーーーーっ⁉？カハッ⁉？⁉？」
苦悶の声が漏れる、装甲に覆われた口からは見えていたなら吐血している姿が分かっただろう。
炎と衝突して数瞬、身体の内に直接拳打が叩き込まれたような衝撃が走る。明らかに普通では起きない現象は直ぐに能力によるものであることを理解させる。
だが理解が及んだのはそれまで。衝撃により体勢が崩れ生まれた隙を縫うように黒の髑髏がアントの正面に躍り出る。
《ピリオド‼？マキシマムドライブ‼？》
右腕が引き絞られる、それはまるで弓を引きしぼる様にも見えてーー寒気が走る。
アレはマズイと本能が警鐘を鳴らすも、防御も回避も取れない程に隙を突かれてしまう。
「グレイシャル・ピリオド‼？‼？」
オリジナルの能力名を敢えて冠したそれは、一見ただの右ストレート。
しかし拳が装甲に触れた刹那、爆発的に冷気が氷となり増殖しアントをいとも容易く吹き飛ばした。
轟音と共に壁と衝突するアント、その様子を見ながらも油断なく構えている尚冬の隣にカイは同じように油断することなく隣に並ぶ。
「手応えは？」
「あった、それこそこれで終いでも不思議じゃないくらいには綺麗に。」
そこまで言い切れても構えを解かないのは、知っているからだ。
たとえ致命傷だろうが腹が裂け臓物が溢れ出そうが、それこそ完全に息の根を止めない限りは歩み続ける英雄を。
そもそもアントは関係者を攫ってまでカイのことを確かめようと

しているのだ、やつと同じくらいとまでいかなくても似た気概であっても不思議ではない。
「……見事だよ、あぁ全く。予想以上の結果で何よりだ。」
衝突によりひび割れた壁で体を支える様に寄りかかっている姿が見える、マキシマムドライブの威力の凄まじさを物語る様に腹部の装甲は、凍りつきつつ罅が入っていた。
だがまだ倒れる気配はない、恐らくは意志と気合いで奴は立っている。
「いざ蓋を開ければロクにダメージを与えられずにこのザマか……全く、意気込んで臨んだ割には実に無様としか言えないな……」
だが、と壁から離れ力強くこちらに向け歩いてくる。そして一定の距離を保ち歩みを止めた。
「確かめただけの価値はあった、それが確かめられただけでも充分だ。だからそろそろ幕引きとしよう。」
言うだけ言って、アントは腰を低くして構えた。何をするつもりかは知らないが、一つだけわかる、宣言した通りこの戦いの幕を引くつもりだ。
アントが卑下する程に楽な戦いではなかったが、終わらせることに依存無く、2人もまた静かに構えた。
カイは刀身に炎を集中させ、尚冬はデットメモリを引き抜きマキシマムドライブを発動させる。
それを合図に3人は同時に駆け出しーー
「シィッ‼?‼?」
「オアァ‼?‼?」
「ライダー・エッジ‼?‼?」
交差し、位置が入れ替わる。程なくして倒れたのは、アントだった。
その胸部に掛けてクロスを描いた裂傷が走り、倒れた後に爆発が起きた。
こうして戦いは終わった、いきなり非現実を叩きつけてきた理不尽な戦いは、それなりにあっさりと終幕となるのであった。
……これから、様々なものを巻き込み、後に【星辰大戦】と称され

ることになる戦いの、序章となる戦いは。